**2**

川田さんの学級では、ふしぎな出来事がえがかれている物語を読み、友達としょうかいし合うことにしました。川田さんは、「もうすぐ雨に」という物語を選んで読み、気になるところに**ふせん**をはっています。次は、**【物語のこれまでのあらすじ】**と**【物語の一部】**です。これらをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

**【物語のこれまでのあらすじ】**

登校前、あみ戸とまどガラスの間にはさまっているかえるを見つけた。ぼくは、助けようと、まどとあみ戸を動かしてみた。しかし、かえるは動かず、ぼくをじっと見つめるばかりだった。「ありがとうって言いたいのかな――。動物の言葉が、分かればいいのになあ。」と言うと、かえるがまばたきして、どこかでチリンとすずみたいな音がした。どこにもすずなんかない。ふと見ると、かえるもいなくなっていた。かえるもすずも、さがしているひまなんかない。ぼくは、学校に向かうために、急いでかいだんをかけ下りた。

**【物語の一部】**

げんかんには、ねこのトラノスケが、ちんまりすわってまっていた。ぼくといっしょに、外に出るつもりなんだ。

「いいなあ、朝から遊びに行けて。」

つぶやいたとたん、すずみたいな、あの音が鳴った。

チリン。

そして、トラノスケが言った。

「ふん。遊びに行くんじゃないよ、だ。」

いや、言うはずないよね。空耳かなあ。

だけど、トラノスケは、つづけてはっきり言ったのだ。

「ねこには、ねこのご用が、たんとあるのさ。」

まさか。

「もうすぐ雨になるんだから。大急ぎで出かけないと。」

トラノスケは、せかせか、しっぽをふった。

あわててドアを開けると、トラノスケは足元をするりとぬけた。

その後から、ぼくも、「いってきまあす。」とさけんで、とび出した。

トラノスケのすがたは、もう見えなかった。

ア もうすぐ雨って――。空は晴れ。

電線の上には、大きなからすが止まっていた。ごみをねらっているのか。それとも木の実かな。

「ちらかしたら、だめだよ。」

つぶやいたとたん、どこかで、またチリンと鳴った。

するとからすが、くわっとくちばしを開いて、言ったのだ。

「わたくしにもわたくしのじじょうがあるんですの。かわいい七つの子が、巣(す)で口を開けてまっているんですからね。」

ぼくも、あんぐり口を開けた。

「もうすぐ雨になるんですから。早く食べ物を持って帰りませんと。」

からすは、あっちへ行けと言わんばかりに、つばさをはばたかせた。ぼくは、あわててかけだした。

道のむこうから、つばめが低空飛(ひ)行でとんできた。つばめはぼくの頭をかすめて、お米屋さんの のきうらにすがたをけした。

「つばめまで口をきいたりして。」

とたんに、チリンと鳴った。
すると、のきうらから声が聞こえてきたのだ。
「いそがしくて、お話ししているひまなんか、ありませんよ。もうすぐ雨になりますからね。」
もう一羽の声も、空からふってきた。
「そうそう。いそがしい、いそがしい。虫とり、虫とり。」
イ ――いったい、どうなってるんだろう。
ふせん
ぼくは、もうなるべくだれとも目を合わせないようにして、学校までかけていった。

トラノスケだけじゃない。からすやつばめの言葉まで聞こえるなんて、本当にどうなってるんだろう。もしかしたら、あの小さなかえるのおれいなのかな。ぼくが、「動物の言葉が分かったらなあ。」なんて言ったからか。とすると、チリンと鳴るのは、「動物がしゃべります。」という合図なのかも。
「じっけん、じっけん。」
ぼくは、教室の後ろにおいてある水そうのところに行った。石の上にいたみどりがめが、ひょいと首をのばして、ぼくを見上げた。
チリン。
「今日は、しっけがここちよい。もうすぐ雨になるんだな。」
やっぱり。
まわりを見回したけど、みどりがめの声は、ぼくのほかにはだれにも聞こえていないみたいだった。

休み時間に、校庭のしいく小屋に行ってみた。
小屋に近づいていくと、チリン、チリン、チリン、つづけざまに鳴りだした。そして、うさぎやにわとりがいっせいにしゃべり始めたのだ。
まるで、がっそうの前の音合わせみたい。
みんなの声がわああんとはんきょうして、なんて言っているのかぜんぜん分からない。だけど、口をそろえて言っていることだけは、ちゃんと聞きとれたよ。
「もうすぐ雨に」ってね。

本当に、ふるのかなあ。かさ、持ってきてないよ。今日はお昼までのじゅぎょうだけど、帰りは雨ときょうそうになるのかな。だいいち「もうすぐ」って、どれくらい「すぐ」なんだろう。動物たちの「すぐ」って、ぼくらの「すぐ」とはちがうのかな。
教室にもどっても、そんなことを考えていたら、つい口に出してしまった。
「もうすぐ雨に――。」
みんなが、ぼくのことを見た。
「なんで、分かるのさ。」
「晴れてるじゃないの。」
ウ ぼくは、こまった。ねこに聞いたとは言えないでしょ。みどりがめやうさぎから、ともね。
エ だけど、みんなでまどからのぞいてみたら、大きな黒い雲がむくむくわいていた。
「ほんとだあ。」

空が暗くなったと思うと、雨がぽつぽつ落ちてきた。
かけだしたぼくの耳に聞こえてきたのは、あの音だ。雨とがっ
ふせん

そうするみたいに、チリン、チリン、鳴り始めたのだ。
しいく小屋の中より、にぎやかだった。チリンチリン、チリンチリン、ひっきりなしに鳴って、遠くから楽しそうな歌声が聞こえてきた。
雨がふるのがうれしかったり、ゆかいだったりするだれかが、どこかにいるのかも。ぴょんぴょんはねている小さなかえるたちを、ぼくは心に思いうかべた。にぎやかにおどったり、歌ったりしているのかな。
だけど、雨がひどくなるにつれて、ふしぎな音も遠い歌声も、雨音にまぎれてきえてしまった。

とうとう、どしゃぶりになった。太い雨が道をたたいて、雨水がすごいいきおいで流れていった。
ぼくは、お米屋さんの のき下で雨宿りさせてもらうことにした。つばめが巣からこちらを見下ろしていたけど、何も言わなかった。
どしゃぶりの中から、何かが足元に走りこんできたと思ったら、トラノスケだった。ぐしょぬれで、足はどろだらけだ。

「ご用は、全部すんだか。」
きいてみたけど、トラノスケは上目づかいでぼくを見て、ぶるっと体をふるっただけだった。

まもなく雨がやんで、うそみたいに青い空が広がった。ぼくはトラノスケをだき上げて、のき下から出た。
帰り道、電線の上にからすは、もういなかった。
家に帰って、トラノスケをごしごしふいてやった。終わると、トラノスケは、たっと、まどべに走っていった。ひなたぼっこしながら、ゆっくり毛づくろいするつもりなんだろう。
せなかを一なめ、二なめしてから、トラノスケは頭を上げて、ぼくの目をじっと見た。
チリンという音は鳴らなかったし、トラノスケも口をきかなかった。でも、トラノスケがなんて言いたいのか、ぼくには、ようく、分かったよ。

（平成二十七年度版　光村図書　国語　三年上　朽木　祥「もうすぐ雨に」による。）

**一**　川田さんは、文の意味をもう一度たしかめるために、――――部**ア**と**エ**の文を読み返しています。次の（1）と（2）の問いに答えましょう。

（1）　次の**ア**の文について、……部「止まっていた」の主語としてふさわしいものを、あとの**1**から**4**までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

**ア**　電線の上には、大きなからすが止まっていた。

1　電線の
2　上には
3　大きな
4　からすが

（2）次の**エ**の文について、┆┆┆┆┆┆┆部「大きな」はどの言葉をくわしくしていますか。ふさわしいものを、あとの**1**から**4**までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

**エ**　だけど、みんなでまどからのぞいてみたら、┆大きな┆黒い雲がむくむくわいていた。

1　黒い
2　雲が
3　むくむく
4　わいていた

**二**　川田さんは、**ふせん**をはったところをもう一度読んでいます。次の（**1**）と（**2**）の問いに答えましょう。

（1）川田さんは、――――部**イ**に表れている「ぼく」の気持ちについて考えています。その説明としてふさわしいものを、次の**1**から**4**までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

1　動物の声が聞こえることにおどろいて、とまどっている。
2　動物の声が聞こえるのは自分一人だと思い、がっかりしている。
3　動物の声が聞こえてにぎやかな様子が思いうかび、よろこんでいる。
4　動物の声が聞こえることがたしかめられて、こうふんしている。

（2）川田さんは、――――部ウについて、「ぼく」がこまった理由を考えています。その説明としてふさわしいものを、次の1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

1　雨がふると、昼休みに運動場で遊べないと思ったから。
2　教室でみんなから注目されて、うれしくなったから。
3　動物から聞いたと言っても、信じてもらえないと思ったから。
4　もうすぐ雨がふるのに、かさを持ってきていなかったから。

三　川田さんは、「もうすぐ雨に」を読み、しょうかいする文章を書いています。次の【川田さんの文章】の［A］の中に入る内容（ないよう）として最もふさわしいものを、あとの1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

**【川田さんの文章】**

わたしは、「もうすぐ雨に」という物語をしょうかいします。

この物語では、チリンという音が鳴ると、動物の声が聞こえるというふしぎな出来事が数回起こります。

最初は、「動物の言葉が、分かればいいのになあ。」と言っていた「ぼく」が、ふしぎな出来事を通して、最後には、

［A］

最後まで読むと、雨がやんだ後に広がる青空を見たときのようにさわやかな気持ちになります。ぜひ読んでみてください。

1　動物の声が聞こえなくても、いつ雨がふり出すかが分かるようになります。
2　動物の声が聞こえなくても、動物の思いをよく考えることができるようになります。
3　動物の目をじっと見るだけで、チリンというすずのような音が聞こえるようになります。
4　動物の目をじっと見るだけで、動物の声を聞くことができるようになります。